

「蓄蔵貨幣の第二形態」について

小 林 威 雄

一

『資本論』第三卷第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかで、マルクスは、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣を二つの形態に、すなわち、「蓄蔵貨幣の第一形態」と「蓄蔵貨幣の第二形態」とに区分し、それぞれの形態における蓄蔵貨幣について簡単にのべている。われわれは、さきに、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣は、なぜこのように「蓄蔵貨幣の第一形態」と「蓄蔵貨幣の第二形態」との二つの形態に区分して考察しなければならないのか、また、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣を「蓄蔵貨幣の第一形態」と「蓄蔵貨幣の第二形態」とに区分することはどういう根拠にもとづいてなされるのか、というように問題を提起し、さしあたり、これらの問題を解決するために、「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄蔵貨幣の第二形態」という資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の二つの形態をそれぞれ個別に考察して、それぞれの形態における蓄蔵貨幣の形成される契機、目的、役割などを把握し、両者の相異点、共通点をあきらかにすることから始めることにした。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が資本の再生産過程において必然的に形成されなければならない契機、その目的、役割などについては前稿（『蓄蔵貨幣の第一形態』について、『河西太一郎先生在職三十五年記念論文集』、『立

教経済学研究』第十三卷第四号所載)において考察したので、つぎに、本稿においては、「蓄蔵貨幣の第二形態」について考察することにする。

まず、マルクスが『資本論』第三卷第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかで「蓄蔵貨幣の第二形態」についてのべている文章を検討することからはじめよう。⁽¹⁾

(1) 本稿においては、貨幣取扱業が発生すると、これにともなつて「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が貨幣取扱業者に集積されるようになるということ、さらに、信用制度が確立している段階においては、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は銀行に集積され、そして銀行によって貸出されて利子生み資本として機能するようになるということ、などについてはとりあつかわない。

二

資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣を「蓄蔵貨幣の第一形態」と「蓄蔵貨幣の第二形態」とに区分し、それぞれの形態における蓄蔵貨幣について明確な規定をあたえているのは、前記の『資本論』第三卷第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかの一つのパラグラフにおいてのみである。ここで、マルクスは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてのべたあと、「蓄蔵貨幣の第二形態」についてつぎのようにのべている。

「つぎに、蓄蔵貨幣の第二形態は、貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態であつて、新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれにぞくする(Die zweite Form des Schatzes ist nun die von brachliegendem, augenblicklich unbeschäftigtem Kapital in Geldform, wozu auch neu akkumuliertes, noch nicht angelegtes Geldkapital gehört.)」(『資本論』第三卷、S.350、長谷部訳、青木版四五三ページ)。

みられるとおり、「蓄蔵貨幣の第二形態」と明記して、これについてマルクスがのべている文章は、非常に要約された簡単なものである。われわれは、前稿において、この文章をつぎのように二つにわけて整理した。

(1) 「蓄蔵貨幣の第二形態」は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」である。

(2) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする。

「蓄蔵貨幣の第二形態」についてのこの二点のうち、「蓄蔵貨幣の第二形態」についての研究においても重要な規定は、いうまでもなく(1)である。そこで、まず、本節においては、この(1)の規定について考察し、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、どういう蓄蔵貨幣であるかということ把握しよう。

マルクスは、「蓄蔵貨幣の第二形態」は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」であるとのべているのであるが、このことは、いいかえれば、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「遊休貨幣資本」(brachliegendes Geldkapital)であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」(unbeschäftigtes, in Geldform seiner Anwendung harrendes Kapital) (『資本論』第三巻、S. 347、長谷部訳、青木版四九二ページ)であるということである。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、どういう蓄蔵貨幣であるかということを理解するためには、この「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」という概念を検討しなければならぬ。

だがしかし、われわれは、この「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」という概念を検討する前に、一般的に、「遊休資本」、「失業資本」という概念はどのように理解されるか、ということについて考察することにする。というのは、「遊休資本」、「失業資本」という概念をどのように理解するかによって、「蓄蔵貨幣の

第二形態」にぞくする蓄藏貨幣が「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であると規定される場合の「遊休」、「失業」という意味を正しく理解することができる基礎があたえられるからである。

「遊休資本」、「失業資本」とは、一般的にいえば「機能していない資本」であるということの意味する。だから、「機能している資本」と「機能していない資本」とをどのように把握するかによって、「遊休資本」、「失業資本」をいろいろな意味に解することができる。

(一) 「資本は、貨幣姿態にとどまるかぎり、資本としては機能せず、したがって自らを増殖しない。資本は遊休する。」(『資本論』第二巻、S. 69、長谷部訳、青木版九七ページ、傍点——引用者)。

この文章を文字どおりに、表面的に読むと、価値を増殖しないということが「資本として機能しない」ということの意味であるというように解される。つまり、資本として機能するということは価値を増殖するということであるから、価値増殖過程に参加している資本は、「機能している資本」であり、この過程に参加していない資本は、「機能していない資本」であるというように考えられる。このように考えるとすれば、価値増殖過程に参加している資本、すなわち、現実に価値増殖の過程のなかにあつて機能している生産資本のみが「機能している資本」となり、この形態以外の資本、すなわち、貨幣資本、現実にはまだ生産資本として機能していない「潜勢的生産資本」(生産在荷)、商品資本はいずれも「機能していない資本」となる。「機能している資本」と「機能していない資本」とをこのように考えるとすれば、ここでは「遊休資本」、「失業資本」は、貨幣資本、「潜勢的生産資本」(生産在荷)、商品資本の形態にある資本であるということになる。

しかし、「機能している資本」と「機能していない資本」とをこのように区別して考えることは妥当でないである

う。価値増殖を連続的、恒常的におこなうことによって、はじめて資本は資本たりうるのであるが、価値増殖をおこなうところの生産過程をたえず中断されることなく連続的、恒常的におこなうためには、生産資本として現実に機能している資本とともに、貨幣資本、「潜勢的生産資本」（生産在荷）、商品資本が同時にあいならんで現存していなければならぬ。なぜなら、資本制生産はそれ自身の性格から流通をも含んでいるのであり、資本の再生産過程は、生産過程と流通過程とを交互にくぐりぬけていく過程であり、生産過程と流通過程との統一として現象するからである。したがって、生産過程をたえず連続的、恒常的におこなうためには、つねに生産在荷を準備しておかねばならぬ。もし、生産諸要素はたえず $G \rightarrow W \xrightarrow{P_m A}$ の行為によってもたらされるのであるから、つねに貨幣資本が現存していなければならぬ。また生産過程において継起的に新たに生産された剰余価値をふくむ商品資本は $W \rightarrow G$ の行為によって貨幣資本 (G') に転形されなければならないが、この転形はたえず継起的におこなわれるので資本の一部分はつねに商品資本の形態において現存していなければならない。貨幣資本、「潜勢的生産資本」（生産在荷）、商品資本はそれら自身においては、直接的に価値増殖には参加していないが、しかし、それらが現存することによってのみ、たえず価値増殖をおこなう生産過程を連続的、恒常的におこなうのである。だから、資本の再生産過程のなかにおいて、貨幣資本、「潜勢的生産資本」（生産在荷）、商品資本の諸形態にある資本は、現実に生産資本として機能している資本とともに、価値を増殖するために機能している資本であると考へなければならぬ。

したがって、「機能している資本」は、現実に生産資本として機能している資本であり、「機能していない資本」は、それ以外の諸形態にある資本であるという理解のもとに、貨幣資本、「潜勢的生産資本」（生産在荷）、商品資本は、「遊休資本」であり、「失業資本」であるというように考へることは正しくないであろう。したがってまた、さ

きの『資本論』の文章もこのように表面的に理解してはならない。

(二) さきへのべたように、生産過程を連続的、恒常的におこなうためには、資本は、貨幣資本、生産資本、商品資本という三つの形態をとり、しかもこの資本の三つの形態は同時に並存し統一されていなければならないが、これらの三つの形態におけるそれぞれの能動的機能をおこなっている資本は、「機能している資本」であり、それぞれの形態における能動的機能をおこなっていない資本は、「機能していない資本」であるというように考える場合である。

ここで、資本の三つの形態におけるそれぞれの能動的機能というのは、貨幣資本は $G \rightarrow W$ \swarrow $P_m A$ という生産資本への転形をおこなうことであり、生産資本は生産物の形成者として、価値形成者(価値増殖者)として機能することであり、商品資本は $W \rightarrow G$ という貨幣資本(G)への転形をおこなうことである。この考え方によれば、それぞれの資本の形態におけるこのような能動的機能をおこなっている資本は「機能している資本」であるが、これらの能動的機能をおこなっていない資本、すなわち、貨幣形態において現存している資本(「準備貨幣資本」)、⁽²⁾「潜勢的生産資本」(生産在荷)、いまだ市場において貨幣資本に転形されていない商品資本(商品在荷)は、いずれも「機能していない資本」となる。「機能している資本」と「機能していない資本」との区別をこのように考えれば、ここでは、「遊休資本」、「失業資本」は、「準備貨幣資本」、「潜勢的生産資本」(生産在荷)、貨幣資本にまだ転形されていない商品資本(商品在荷)の形態にある資本であるということになる。

さきの(一)において引用した『資本論』の文章は、この(二)における意味において理解すべきであると考ええるが、この(二)における意味で「遊休資本」という言葉がもちいられているところは、『資本論』の他の箇所においてもみいだすことができる。たとえば、『資本論』第二巻第二篇第十五章の第一節にはいるまでの箇所においては、

(二)のような意味で「遊休」という言葉をもちいており、また、つぎの文章においては、この(二)の「遊休資本」の意味がはっきりあらわされている。

「生産過程のための条件として準備されているにすぎない潜在的生産資本部分、たとえば、紡績業における棉花・石炭などは、生産物形成者としても価値形成者としても作用しない。この部分は遊休資本である、といっても、その遊休は、生産過程の中断ない流れのための一条件をなすのだが」(『資本論』第二卷、S.117、長谷部訳、青木版一五九ページ、傍点——引用者)。

しかし、「機能している資本」と「機能していない資本」とを、貨幣資本、生産資本、商品資本のそれぞれの形態における能動的機能をおこなっているか、あるいは、おこなっていないか、という点にもとづいて区別し、そして「遊休資本」、「失業資本」を、それぞれの資本の三つの形態における能動的機能をおこなっていない資本であるというように理解することは、誤解をまねくおそれがあると思う。というのは、この(二)におけるような「遊休資本」、「失業資本」は、けっして本来の意味における「遊休資本」、「失業資本」ではないと考えるからである。

なるほど、「準備貨幣資本」、「潜勢的生産資本」(生産在荷)、貨幣資本にまだ転形されていない商品資本(商品在荷)は、それぞれの資本の形態における能動的機能はおこなっていない。だがしかし、これらのものは資本の再生産過程のなかにふくまれており、それらは生産過程を連続的、恒常的におこなうための資本の再生産過程のなかにおいてとる一状態であり、それらが存在することによって貨幣資本、生産資本、商品資本は、それぞれの能動的機能をおこなうるのである。だから、それらは貨幣資本、生産資本、商品資本のそれぞれの能動的機能をおこなうための一状態であり、その状態はそれぞれの能動的機能の「休息」である。「準備貨幣資本」、「潜勢的生産資本」

(生産在荷)、貨幣資本にまだ転形されていない商品資本(商品在荷)は、資本の再生産過程のなかにあって、充用されている、したがって、失業していない「機能している資本」であり、ただ、それぞれの資本の形態における動的機能を休息しているにすぎないというように考えなければならぬと思う。

(2) 「準備貨幣資本(Reservegeldkapital)」という言葉は、『資本論』第二卷第一篇第二章生産資本の循環、第四節準備金のところででてくる。わたくしは、前稿において、「準備貨幣資本」は「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるとのべた。この点については前稿七〇ページ以下を参照されたい。

(三) 生産過程を連続的、恒常的におこなうために、したがって、価値増殖をたえず連続的におこなうために、再生産過程のなかに存在する資本は、「機能している資本」であり、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在している資本は、「機能していない資本」であるというように考える場合である。「機能している資本」と「機能していない資本」とを、資本の再生産過程のなかにふくまれていくか、あるいは、この過程の外部に存在しているかという点にもとづいて区別するならば、(二)において「機能していない資本」とされた「準備貨幣資本」、「潜在的生産資本」(生産在荷)、貨幣資本にまだ転形されていない商品資本(商品在荷)は、いずれも「機能している資本」となる。だから、この(三)の考え方によれば、これらは、けっして「遊休資本」、「失業資本」ではない。ここで、「遊休資本」、「失業資本」と考えられるものは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在している資本である。「遊休資本」、「失業資本」という概念の本来の意味は、資本の再生産のために現実にもちいられていない、再生産過程の外部にあって「遊休」している、「失業」している資本であると考えるべきであると思う。

以上、「遊休資本」、「失業資本」とは、一般的には「機能していない資本」であると考えられるが、「機能している資本」と「機能していない資本」とがどのように把握されるかを三つの場合について考察し、それによって「遊休資本」、「失業資本」がいろいろな意味に解することができるということについてのべてきた。

では、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという場合の「遊休」、「失業」という言葉は、右の三つの場合のどの「遊休」、「失業」の意味をあらわしていると考えべきであろうか。

(一)の「機能している資本」と「機能していない資本」についての考え方は、さきにものべたように資本の再生産過程というものを無視している考え方であり、この考え方にもとづく「遊休資本」、「失業資本」の理解は当然正しいものではない。だから、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという場合の「遊休」、「失業」は、もちろんこの(一)におけるような意味ではない。

つぎに、(二)の考え方によれば、資本の再生産過程のなかにふくまれており、生産過程を連続的、恒常的におこなうための一つの不可欠な条件をなしているとしても、貨幣資本としての $G-W$ \swarrow $P_m A$ という生産資本への転形をおこなうという能動的機能をはたしていない「準備貨幣資本」は「遊休貨幣資本」となり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」となる。ところで、この「準備貨幣資本」というのは、前稿において考察したように、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」(『資本論』第三卷、S. 350、長谷部訳、青木版四五三ページ)である。すなわち、「準備貨幣資本」は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣で

ある。したがって、「遊休資本」、「失業資本」を(二)のように考えれば、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣もまた「遊休貨幣資本」となり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるということになってしまふ。

「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという場合の「遊休」、「失業」を(二)のように考えるとすれば、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣と「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣との相異を正しく理解することができなくなる。そして、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという規定を正しく理解することができなくなる。したがって、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は「遊休」、「失業」は、(二)におけるような意味ではない。

最後に、(三)の考え方にもとづいて考察してみよう。(三)の考え方のもとにおいては、「遊休資本」、「失業資本」とは、資本の再生産過程において機能していない、したがって、この過程のなかにふくまれていないで、それから排除され、分離されており、その外部に存在している資本である。ここでは、「準備貨幣資本」、すなわち、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、けっして「遊休貨幣資本」ではなく、また「貨幣形態で充用を待っている失業資本」でもない。なぜなら、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の再生産過程において必然的に形成され、生産過程を連続的、恒常的におこなうために必要とされる不可欠の一条件をなしており、生産資本に転形すべく他の諸段階との関連によって規定されている支払手段および購買手段の準備金としての貨幣資本であるからである。だから、ここでは、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の再生産過程のなかに存在し、機能している、

充用されている貨幣資本である。

「遊休資本」、「失業資本」という概念をこの(三)におけるような意味に理解するならば、われわれは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣とを明確に区別して考えることができる。そして、また「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという規定を正しく理解することができであろう。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であると規定されている場合の「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」とは、資本の再生産過程において生産過程の連続性を維持するために他の諸段階との関連によって生産資本に転形すべき貨幣資本として機能していない、したがって、資本の再生産過程から排除され、分離されており、その外部に存在している本来の意味において「遊休」し、「失業」している貨幣資本のことである。かくして、このような意味における「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」が、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であると理解しなければならぬ。

以上の考察によって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるという規定をどのように理解すべきであるかということがあきらかになったと思う。

つぎに、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在している貨幣資本であるといっても、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程にたいしてまったくなんらの関係をもたないものであるということの意味するものではないということについて考察しておこう。

第一に、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における諸契機から必然的に、または偶然的に形成されるものであって、それぞれ形成される契機において資本の再生産過程に密接な関係をもっている。なお、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が資本の再生産過程におけるどのような契機にもとづいて形成され、それがどのような目的、役割をもって存在しているかということについてはつぎの第三節においてとりあつかう。

第二に、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在しているのであるから、それは、流通からひきあげられて流通の外部にでているが、しかし、一定の大きさにたつた場合、あるいは一定の期間が到来した場合、あるいはまた、資本の再生産過程が外的な諸事情によって攪乱された場合には、再生産過程にふたたびは入り生産資本に転形すべき貨幣資本としての機能を果たし、流通にふたたびは入り購買手段あるいは支払手段として機能する。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程にたいしてまったく無関係なものではけつてない。もし、それが無関係なものであるとすれば、それが「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるとは規定しえないであろう。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程においてふたたび充用されるべく規定されている貨幣資本であり、充用されるまでのあいだこの過程の外部にあって一時的に「遊休」し、「失業」している貨幣資本であるのである。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」（傍点——引用者）であるという規定の「目さき」というのはこのような意味である。

以上、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」であるという規定について検討してきたのであるが、では、この「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本」、いいかえ

れば、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程におけるどのような契機にもとづいて形成されるのであろうか、そして、それは具体的にどういう目的、役割をもって存在しているのであろうか。このような問題を正しく把握しなければ、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を充分に理解したことになるであらう。そこで、つぎに「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が形成される諸契機について考察し、さらに、これらの諸契機にもとづいて形成される「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の目的、役割などについて考察してみよう。

三

「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程におけるどのような諸契機にもとづいて形成されるか、またそれらは具体的にどういう目的、役割をもって存在しているのか、という問題を考察する場合に、ひとつの手がかりをあたえてくれるものは、さきの『資本論』第三巻第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかにおける「蓄蔵貨幣の第二形態」についての叙述の後半の部分である「新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれにぞくする」という文章である。この文章で「これに」というのは、いうまでもなく「蓄蔵貨幣の第二形態」ということであるから、ここで、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」という形態で形成されるということを理解することができる。そして、また同時にこの文章において「新たに蓄積された未投下貨幣資本」と叙述されていることから、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、たんに「新たに蓄積された未投下貨幣資本」というただ一つの形態においてのみ存在するものではないということを理解することができる。そればかり

でなく、さらに、資本の再生産過程における必然的な契機から形成される「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が默示的に前提された上で、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」も「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である、というように読みとることができる。そこで、われわれは、第一に、ここでマルクスによって明示されていない資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成される「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣から考察しなければならないであろう。

ところで、わたくしは前稿においてつぎのようにのべておいた。「資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣にかんするこの『蓄蔵貨幣の第一形態』および『蓄蔵貨幣の第二形態』という明確な区別は、『資本論』第三巻のさきに引用した文章（『資本論』第三巻第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかにある文章）においてのみみうけられるにすぎず、『資本論』の全巻にわたって他の箇所においてはまったくおこなわれていない。だから、言葉にとらわれると、『資本論』の他の箇所においては、『蓄蔵貨幣の第一形態』および『蓄蔵貨幣の第二形態』についての叙述は存在しないということになってしまう。しかし、言葉にとらわれず、さきの『蓄蔵貨幣の第一形態』および『蓄蔵貨幣の第二形態』についての簡単な諸規定にもとづいて内容的に考察してみると『資本論』の他の箇所においても『蓄蔵貨幣の第一形態』および『蓄蔵貨幣の第二形態』についての叙述をみいだすことができる。これらの箇所は、したがって、『蓄蔵貨幣の第一形態』および『蓄蔵貨幣の第二形態』についての考察をふかめていく場合に重要な手がかりをあたえてくれるわけである」（五六七ページ）と。そして、すでに第二節において「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程において生産過程の連続性を維持するために他の諸段階との関連によって生産資本に転形すべき貨幣資本として機能していない、したがって、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあつ

て「遊休」し、「失業」しているところの「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるということをあきらかにした。この理解にもとづいて『資本論』を読んでみると、さきのマルクスの文章において明示されていない資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成される「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣として固定資本の減価償却基金をみいだすことができる。そこで、第一に固定資本の減価償却基金について考察しよう。

(一) 固定資本の減価償却基金

労働用建物や機械、原料、補助材料などの不変資本のうちの機械(および労働用建物)など、要するに労働手段という名称のもとに一括されるものは、ある一定の期間のあいだたえず反復される労働過程においてたえずくりかえしおなじ機能をおこなう。したがって、これらの労働手段は、長かれ短かれ一定の期間、生産部面に繫縛されている。しかし、それらはその機能をおこなうのにもなって漸次消耗し、この漸次的消耗とともにこの不変資本部分の価値の一部分は、その助力によって生産された生産物に移行する。だから、これらの労働手段の価値の一部分は、それらの機能したがって消耗にもなって生産物に移行するが、他の価値部分は依然として労働手段に固定されている。この固定されている価値部分は、労働手段が役にたたなくなるまで、したがってまた、労働手段の価値が長かれ短かれ一定の期間のあいだたえず反復される労働過程からつくりだされてくる一定分量の生産物に配分されてしまうまで、たえず減少する。しかし、労働手段として役だつかぎり、この不変資本の価値の一部分は依然として労働手段に固定されている。かくして、この不変資本部分の流通は独自のものとなる。その独自性はつぎの点にある。「第一に、この部分はその使用形態において流通するのではなく、その価値のみが流通するのであり、しかもそれが労働手段から生産物――

商品として流通する生産物——に移行するにつれて漸次的・断片的に流通するのである」第二に「労働手段の全機能期間にわたり、その価値の一部分は、その助力によって生産される商品に対立して自立的に、つねにその労働手段に固定されている」。マルクスは、こうした独自性をもつ不変資本部分を固定資本となづけた。すなわち、「こうした独自性により、この不変資本部分は固定資本 (Fixes Kapital) という形態をうけとる」(『資本論』第二巻、S. 152、長谷部訳、青木版二〇四ページ)と。この場合に注意しなければならないことは、「生産手段に投下された資本価値の一部分に固定資本の性格をあたえる規定は、もっぱら、この価値が流通する独自の様式のうちにある。この独自の流通様式は、労働手段がその価値を生産物に交付する——または価値形成者として生産過程中でふるまう——独自の様式から生ずる。そしてこの後者そのものはまた、労働過程における労働手段の機能の特殊的方式から生ずる」(『資本論』第二巻、S. 153~4、長谷部訳、青木版二〇五~六ページ)ということである。

このように、不変資本の一部分に固定資本の性格をあたえる規定は、その価値が流通する独自の様式のうちにあるのであるが、この固定資本の独自の流通様式から、固定資本の独自の回転が生じてくる。

さきにもべたように、現物形態での固定資本が消耗によってうしなう価値部分は、生産物の価値部分として流通する。そしてこの生産物はその流通によって商品から貨幣に転形する。だから、生産物の価値の一部分として構成されている労働手段の価値部分もまた同時に貨幣に転形する。かくして、労働手段の価値はいまや二重に存在することになる。すなわち、その一部分は、生産過程にぞくする労働手段の現物形態のなかに固定されたままで存在し、他の部分は貨幣の形態で存在する。そして、労働手段の現物形態において存在する価値部分はたえず減少し、貨幣形態に転形された価値部分はたえず増加し、ついに、労働手段はその生涯を終って、その全価値がその遺骸から離れて貨幣に

転形する。ここに、固定資本の回転における独自性があらわれている。固定資本の価値の貨幣への転形は、その価値部分の担い手である商品の貨幣への転形と歩調をおなじくするが、貨幣形態から現物形態への再転形は、労働手段自身の再生産期間によって、すなわち、労働手段が消耗しつくされてしまつて、おなじ種類の新しい労働手段により更新されなければならない時間によって規定されている。ある機械の機能期間がたとえば十年であるとすれば、この機械に最初に投下された価値の回転期間は十年ということになる。この期間が経過する以前においては、この機械は更新される必要はなく、その現物形態で機能しつづける。そのあいだに機械の価値は、断片的に、それによって生産された諸商品の価値部分として流通し、かくして漸次貨幣に転形される。そして、ついに十年目の終りには機械の価値はすっかり貨幣に転形されて、貨幣から機械に再転形される。つまりその回転が完了する。

このような固定資本の独自のな回転から、その再生産をおこなうまでのあいだ、固定資本の価値は漸次的に貨幣形態において積立てられていなければならないということが必然的に生じてくる。この貨幣形態において積立てられつつある固定資本の価値が固定資本の減価償却基金とよばれているものである。だから、固定資本の減価償却基金は、固定資本の独自のな回転によって必然的に形成されなければならない。

さて、固定資本の減価償却基金は、このように固定資本の独自のな回転によって必然的に形成されなければならないのであるが、その形成は、現物形態での固定資本の助力によって生産された諸商品が貨幣に転形されると同時に、これらの諸商品にふくまれている固定資本の磨損価値部分も貨幣に転形され、この貨幣を流通からひきあげることによつておこなわれる。この固定資本の減価償却基金の形成、積立は、多かれ少かれ一定の年数からなる再生産期間、つまり、不変資本中の固定的要素がその旧来の現物形態のまま生産過程において機能しつづける期間が終るまでくり

かえしつづけておこなわれる。固定資本の再生産期間が終ったときに、その減価償却基金として積立てられていた貨幣は、一挙に流通にはいり新しい労働手段の購入にあてられる。すなわち、貨幣形態から現物形態に再転形される。だが、つぎには、ふたたびこの新しい労働手段のつぎの更新にさいしての準備として減価償却基金の積立がおこなわれなければならない。

したがって、固定資本の減価償却基金は、固定資本の現物形態が更新され、填補されるまでのあいだ、その更新・填補のための準備として存在する。だから、それは「不変資本価値の一部分たる固定部分の貨幣形態である」(『資本論』第二巻、S. 485、長谷部訳、青木版五八九ページ)。それは流通からひきあげられている貨幣形態において存在するのであるから、減価償却基金として積立てられている貨幣は蓄蔵貨幣の形態にある。だから、固定資本の減価償却基金の積立は貨幣蓄蔵である。そして「この貨幣蓄蔵は、それ自身、資本制的再生産過程の一要素である。すなわち、固定資本がその寿命を終り、したがって、その全価値を生産された商品に交付してしまつて今や現物で填補されねばならぬ時までの、固定資本またはその個々の要素の価値の再生産および積立——貨幣形態での——である」(同上)。

だが、固定資本の減価償却基金としての蓄蔵貨幣は、固定資本を現物形態で更新し、填補するためにもちいられるべく規定されている蓄蔵貨幣であり、したがって貨幣資本であるが、資本の再生産過程のなかにあって、生産過程を連続的、恒常的におこなうために機能しつづける貨幣資本ではない。というのは、生産過程においては、固定資本の現物形態は労働手段としてその機能を果たしている、つまり、固定資本の減価償却基金が充用されることなしに、生産過程は連続的におこなわれ、したがって価値増殖がたえずおこなわれているからである。固定資本の減価償却基金として積立てられている貨幣は、「固定資本の新たな諸要素に再転形されて死滅した諸要素を填補するときのみ、

その蓄蔵貨幣形態をうしない、かくしてはじめて、流通に媒介される資本の再生産過程へふたたび能動的にはいりこむ」(『資本論』第二卷、S. 445、長谷部訳、青木版五八九ページ)。したがって、固定資本の減価償却基金として存在する貨幣資本は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在し、不変資本中の固定的要素がその旧来の現物形態のまま生産過程において機能しつづけているあいだ「遊休」し、「失業」している貨幣資本であるということが出来る。第二節において考察したように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣とは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しているところの「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。そこで、われわれは、固定資本の減価償却基金は「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であると規定することが出来るであろう。

以上の考察によって、固定資本の減価償却基金は、資本の再生産過程における固定資本の独自の回転によって必然的に形成され、固定資本を現物形態で更新し、填補するためにもちいられるべく規定されている貨幣資本であり、それは資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在している「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である、すなわち、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるということがあきらかになった。

そこで、つぎに『資本論』第三卷における「蓄蔵貨幣の第二形態」についての叙述において、マルクスが「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣として明示している「新たに蓄積された未投下貨幣資本」について考察しよう。

(二) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」

「新たに蓄積された未投下貨幣資本」というのは、生産の規模を拡大するために、資本の再生産過程において機能

すべく規定されている貨幣資本であるが、まだこの過程において貨幣資本として機能していない、したがってこの過程で充用されていない、投下されていない積立てられつつある貨幣化された剰余価値である。したがって、貨幣形態において積立てられている剰余価値についての考察は、同時に「新たに蓄積された未投下貨幣資本」についての考察である。

資本制生産の全性格は、投下された資本価値の増殖によって、したがって、第一にはできるだけ多くの剰余価値の生産によって規定されている。だが、第二には資本の生産によって、つまり、剰余価値の資本への転化によって規定されている。実現された剰余価値が全部資本家によって非生産的に、個人的に消費されるならば、再生産は以前とおなじ規模においておこなわれる。すなわち、単純再生産の過程が進行するにすぎない。しかし、このように実現された剰余価値を非生産的に消費するために資本制生産をおこなうということは、資本の自己目的に矛盾している。この矛盾は、実現された剰余価値を既存の資本に加えて生産の規模を拡大して、その運動をつづける拡大再生産によって解決される。資本制生産にとっては、この拡大再生産こそが本来の発展形態である。単純再生産についての考察は、拡大再生産を科学的に説明するための理論的抽象にすぎない。⁽³⁾したがって、資本制生産は、たえず拡大再生産の途をすすまねばならない。拡大再生産は、資本制生産にとって一つの法則となっている。

(3) 「同等不変な規模での単純再生産なるものは、——一方では、蓄積または拡大された規模での再生産がまったく見られない——ということとは資本制の基礎上では奇妙な仮定であり、他方では、生産上の諸関係は年度がことなれば絶対的に同等不変（これが前提されている）ではない、というかぎりにおいて、——一つの抽象として現象する」（『資本論』第二巻、S. 367-8、長谷部 訳、青木版五一五ページ）。

このように、拡大再生産は資本制生産の本来の発展形態であるが、生産の規模を拡大し、拡大再生産をおこなうためには資本を追加しなければならない。したがって、資本家は、実現された剰余価値の全部を個人的に、非生産的に

消費することをやめ、その一部分を「追加資本」としてもちいなければならない。

ところで、実現され貨幣化された剰余価値 g の一部分が、ただちにふたたび既存の資本価値に追加され、かくして既存の資本 G と一緒になって G' という大きさでもって再生産過程にはいりこみうるかどうかということは、 g のたんなる存在とは無関係な事情にかかっている。「第一の事業とは別に創業される第二の自立的事業における貨幣資本として g を役立たせようとしても、 g がこれに充用されるのは、 g がこの事業に必要な最小限の大きさを有する場合のみだということとはあきらかである。また g を最初の事業の拡張に使用しようとしても、 P の質料的諸要因の関係やそれらの価値関係のために、 g はやはり一定の最小限の大きさをもたねばならない。この事業で作用する一切の生産手段には、質的な相互関係ばかりでなく、一定の量的な相互関係、比率的な大きさがある。生産資本にはいりこむ諸要因のこのような質料的関係およびそれによって担われる価値関係は、 g が生産資本の増加分としての追加的生産手段および労働力に——または前者のみ——転態されうるものとなるためにもたねばならない最小限の大きさを規定する」(『資本論』第二巻、S. 78 長谷部訳、青木版一〇九ページ)。

このように、生産過程を拡大するための諸比率というものは、恣意的に規定されるものではなくして、技術的に指定されている生産手段および労働力の質料的関係、およびそれによって担われる価値関係によって規定されている。だから、実現された剰余価値の一部分は、資本化されるはずではあっても、しばしばいくつもの資本の循環の反復によってはじめて現実的に「追加資本」として機能しうる大きさにたつことがある。 g が事業を拡張するために必要とされる最小限の大きさをもたないかぎり、資本の循環によって継起的に生みだされる g の総額が G と一緒になって

$G' - W' \wedge PmA$

において機能しうるまで、資本の循環は、幾度も反復されねばならない。したがって、 g は、現実に

「追加資本」として機能しうる大きさにたつするまで積立てられていなければならない。ここに、 g が一時的に積立てられなければならないという必然性がある。

この積立は、生産過程において生産された剰余価値をふくむ商品資本 (W) が貨幣資本 (G) に転形され、その剰余価値部分である g の一部分を流通からひきあげることによっておこなわれる。したがって、流通からひきあげられている g は蓄藏貨幣の形態にあり、 g の積立は貨幣蓄藏である。この場合の貨幣蓄藏について、マルクスはつぎのようについて述べている。

「かくしてここでは、貨幣蓄藏は資本制的蓄積過程にふくまれる。この過程にともなう。だが同時に本質的にはこの過程から区別される。一契機として現象する」(『資本論』第二巻、S.74、長谷部訳、青木版一〇三ページ)。

「だから、この場合には、貨幣蓄積、貨幣蓄藏は、現実の蓄積——産業資本の作用する規模の拡張——に一時的にともなう過程として現象する」(『同上』S.79、一一〇ページ)。

「ところがここでは、蓄藏貨幣が貨幣資本の形態として現象し、貨幣蓄藏が資本蓄積に一時的にともなう過程として現象する」(『同上』S.79-80、一一〇ページ)。

積立てられている貨幣形態において現存する剰余価値の蓄藏貨幣形態は、現実に機能する資本に転化するために、資本の再生産過程の外部にあって機能的に規定されている準備段階にあるのであるから、このような蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、資本の蓄積過程にふくまれており、この過程に一時的にともなうものとして現象する。だがしかし、同時にこの貨幣蓄藏そのものによっては、資本の再生産過程はなら拡大されえないのであるから、本質的には、それは資本の蓄積過程からは区別されていると考えなければならない。 g を積立てるといふ貨幣蓄藏は、以上のように

規定されている貨幣蓄藏であるのである。

したがって、積立てられている g は、流通からひきあげられて蓄藏貨幣の形態にあるが、それはたんなる蓄藏貨幣ではない。それは、それが「追加資本」として機能しうる大きさにたつすれば、資本の再生産過程のなかにはいりこみ、現実はこの過程において機能しつつある貨幣資本と一緒にたつて生産の規模を拡大するために生産資本の諸要素に転形されるべき使命、目的をもっている貨幣資本である。しかしながら、それがこのような目的によって規定されている貨幣資本であるといっても、それはまだ資本の再生産過程にはいりこんでおらず、この過程において貨幣資本としては機能していない、まだ機能をはたす能力をもっていない貨幣資本である。したがって、それは資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあつて、「追加資本」として機能しうる大きさにたつするまでのあいだ「遊休」している、「失業」している「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。かくして、積立てられている g 、すなわち、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣であると規定することができる。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

(4) 積立てられている g は、本来、それが現実には「追加資本」として機能しうる最小限の大きさにたつれば、再生産過程のなかにはいつて生産の規模を拡大するにもちいられるべきものであるが、なお、それは「W—Gなる過程が正常的な限度以上に延長されて商品資本の貨幣資本への転形が異常に手間どる」場合、あるいはまた、「この転形が完了しても、たとえば、貨幣資本が転形されるべき生産手段の価格が循環開始当時の水準よりも騰貴している」場合などに生ずる資本の循環の攪乱を解決するための「準備金」としての「特殊な副次的役割」をはたすことができる。この点については、『資本論』第二巻第一篇第二章生産資本の循環、第四節準備金、および前稿七一―二ページを参照されたい。

(5) 『資本論』第二巻における積立てられている g についての叙述のなかには、それが「潜勢的貨幣資本」(potentielles Geldkapital) あるいは「潜在的貨幣資本」(latentes Geldkapital) である、と云うことをたびたびいふことができる。そこで

「蓄藏貨幣の第二形態」について

「潜勢的」、「潜在的」という言葉の意味について簡単にふれておこうと思う。なお、「潜在的」、「潜勢的」という表現の由来については、『資本論』第二巻第一篇第二章第二節蓄積と拡大された規模での再生産のなかの註(六)においてエンゲルスがべている。

「だから剰余価値が麻痺して蓄藏貨幣となり、この形態で潜在的貨幣資本を形成する。潜在的というのは、けだし、それが貨幣形態にとどまるあいだは資本として作用しえないからである。」(『資本論』第二巻、S.74、長谷部訳、青木版二〇三ページ)。

この文章によって、あきらかなように、「潜在的」というのは「資本として作用しえない」からであるということになるが、「資本として作用しない」ということはどういうことを意味するのかということが問題となるであろう。ここで、ふたたび本稿の第二節において「遊休資本」、「失業資本」について考察したときとおなじ考慮をほらなければならぬであろう。本稿の第二節において「機能している資本」と「機能していない資本」とについて考察した三つの場合の(一)は問題外にすると、一つは(二)の「生産過程を連続的、恒常的におこなうためには、資本は、貨幣資本、生産資本、商品資本という三つの形態をとり、しかもこの資本の三つの形態は同時に並存し統一されていなければならないが、これらの三つの形態におけるそれぞれの能動的機能をおこなっている資本は、『機能している資本』であり、それぞれの形態における能動的機能をおこなっていない資本は『機能していない資本』である」というように考える場合」である。

「機能していない資本」を(二)のように考えとすれば、「準備貨幣資本」すなわち「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣、生産在荷、商品在荷は、それぞれ「潜勢的貨幣資本」、「潜勢的生産資本」、「潜勢的商品資本」となる。このような意味において、「潜勢的生産資本」という言葉がもちいられている箇所は、たとえば、「生産過程のための条件として準備されているにすぎない潜在的生産資本部分たとえば、紡績業における棉花・石炭などは、生産物形成者としても価値形成者としても作用しない」(『資本論』第二巻、S.117、長谷部訳、青木版一五九ページ、傍点——引用者)、「まさに在荷形成を考察した際すでのべたように、多かれ少かれ一定分量の潜勢的生産資本——すなわち、だんだんに生産過程にはいりこむために多かれ少かれの分量で貯えられていなければならない生産用に予定された生産手段——が必要である」(同上、S.245、三二六ページ、傍点

——引用者)などがあり、「潜勢的商品資本」という言葉がもちいられている箇所は、たとえば、「継続的な商品諸分量が現実

に発送されるまで大量的に潜勢的商品資本として堆積されることはなく、……」(同上、S. 248、三三二ページ、傍点——引用者)などがある。

また、このような意味で「潜勢的貨幣資本」という言葉をもちいている箇所は、たとえば、「だから、資本の流通時間を生産時間

間に転化させるのに必要な追加資本の到来は、投下資本の大きさと総資本が必然的に投下される期間の長さを増大させるばかりでなく、またとくに、投下資本のうち貨幣準備として実存する——つまり貨幣資本の状態にあって潜勢的貨幣資本の形態をとる——部分を増大させる」(同上、S. 262、三四一ページ、傍点——引用者、なお、この文章においてもちいられている「追加資本」は、本文(二)「新たに蓄積された未投下貨幣資本」のところででもちいられている「追加資本」とは意味が異なる)などがある。

すなわち、この(二)のように考えれば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣も「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣もともに「潜勢的貨幣資本」となる。マルクスは、『資本論』の第三巻においてこのことをはっきりのべている。「資本の一部分はたえず蓄蔵貨幣・潜勢的貨幣資本として現存しなければならぬ、——購買手段の準備金、支払手段の準備金、貨幣形態で充用を待っている失業資本」(『資本論』第三巻、S. 347、長谷部訳、青木版四四九ページ、傍点——引用者)と。

しかしながら、「剰余価値が麻痺して蓄蔵貨幣となり、この形態で潜在的貨幣資本を形成する」という場合の「潜在的貨幣資本」を(二)のように考えれば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣とを区別することができなくなってしまう。この場合の「潜在的貨幣資本」は、(三)の考え方にもとづいて、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあるが、再生産過程にはいり生産資本の諸要素に転形されるべく規定されているという意味における「潜在的貨幣資本」であると理解しなければならぬであろう。

なお、参考までに『資本論』においては「潜勢的」という言葉をつぎのようにももちいていることを紹介しておこう。

「可変資本はさしあたり、資本家の手に貨幣資本として実存する。それが貨幣資本として機能するのは、彼がそれで労働力を買うからである。それが彼の手に貨幣状態でとどまるかぎり、それは、貨幣形態で実存するあたえられた価値にほかならず、したがって不変量であって可変量ではない。それは潜勢的のみに可変資本である、——まさにその労働力への転態可能性によって」(『資本論』第二巻、S. 443、長谷部訳、青木版五七四ページ)。

「商品資本は、即自的には同時に貨幣資本、すなわち、商品の価格で表現された一定額の価値である。使用価値としては、商品資本は、一定分量の一定使用対象であって、これは恐慌期には過剰に現存している。だが、貨幣資本自体としては、潜勢的貨幣資本は、一定分量の第二形態」について

幣資本としては、商品資本はたえざる膨脹および収縮を免れない。恐慌の前夜および恐慌中には、商品資本は、潜勢的貨幣資本としての属性においては収縮している」（『資本論』第三卷、S. 535、長谷部訳、青木版六九五ページ）。さらに、もう一箇所紹介しておきたいのであるが、引用が長くなるので、つぎのところを参照されたい。『資本論』第三卷第五篇第二十一章利子生み資本の原典 S. 389、長谷部訳、青木版五〇四〜五〇五ページ。

以上、資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成される「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣として（一）固定資本の減価償却基金、（二）「新たに蓄積された未投下貨幣資本」という二つの「資本形態」をあげ、それぞれの形成される契機、目的、役割などについてあきらかにしてきた。

そこで、第三に資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成されるものではないが、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成される「遊離貨幣資本」について考察することにする。というのは、この「遊離貨幣資本」は、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の「特殊的形態」であると考えるからである。

（三）「遊離貨幣資本」

ここで、「遊離貨幣資本」という場合の「遊離」は、マルクスが「資本の遊離」というのは、生産を旧来の規模の限界内で続行するためには、生産物の総価値のうち従来は不変資本または可変資本に再転形されねばならなかった一部分がいまや自由に処分される余分なものとなるという意味である」（『資本論』第三卷、S. 132、長谷部訳、青木版一八二ページ）とのべているような意味における「遊離」である。そして、資本の再生産過程にとって過剰となり、余分になってこの過程から遊離された貨幣が貨幣資本として現象するのは、「それが原資本価値の成分であり、したがって資本として作用しつづけるべきであって、たんなる流通手段として支出されるべきではないからである」（『資本論』

したがって、ここで「遊離貨幣資本」というのは、『資本論』第二卷第二篇第十五章資本投下の大きさに及ぼす回転時間の影響の第四節までにおいてのべられているような「遊離貨幣資本」ではない。⁶⁾

(6) 『資本論』第二卷第十五章の第四節までのところでのべられている「遊離貨幣資本」とは、資本の再生産過程において生産過程を連続的、恒常的におこなうための不可欠の条件をなしているところの「準備貨幣資本」のことをいっているのであって、それは「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣であると考える。ここで、マルクスが「遊離資本」といつている意味は、本稿第二節において「遊休資本」、「失業資本」について考察した場合の(二)の考え方にもとづくものである。したがって、このような「遊離貨幣資本」は、本来の意味における「遊離貨幣資本」ではないと考える。

さて、さきにもべたように、「遊離貨幣資本」は、資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成されるものではなく、一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に形成される。そこで、どのような諸条件のもとにおいてこの「遊離貨幣資本」が形成されるかということについてみてみよう。

いずれの場合にも生産の規模は同等不変であることが前提されている。

(1) 回転期間、生産物 W' の価格が変わらないで、生産諸要素(生産手段および労働力)の価格が低落した場合。
(2) 回転期間、生産諸要素の価格が変わらないで、生産物 W' の価格が騰貴し、この騰貴した価格において実現された場合。

(3) 生産諸要素および生産物 W' の価格が変わらないで、回転期間が短縮された場合。

(4) 回転期間が変わらないで、(a) 生産物 W' の価格低落以上に生産諸要素の価格が低落した場合、(b) 生産諸要素の価格騰貴以上に生産物 W' の価格が騰貴した場合、(c) 生産諸要素の価格低落、生産物 W' の価格騰貴がともにあった場合。

(5) 生産諸要素の価格が変わらないで、(a)回転期間の延長の割合以上に生産物 W' の価格が騰貴した場合、(b)生産物 W' の価格低落の割合以上に回転期間が短縮された場合、(c)回転期間の短縮、生産物 W' の価格騰貴がともにあった場合。

(6) 生産物 W' の価格が変わらないで、(a)回転期間の延長の割合以上に生産諸要素の価格が低落した場合、(b)生産諸要素の価格騰貴の割合以上に回転期間が短縮された場合、(c)回転期間の短縮、生産物諸要素の価格低落がともにあった場合。

(7) 回転期間、生産諸要素および生産物 W' の価格のいずれもが変動する場合には、つぎのような諸条件のもとにおいて「遊離貨幣資本」が形成される。

- (a) 回転期間の延長、生産物 W' の価格低落の割合以上に生産諸要素の価格が低落した場合。
- (b) 回転期間の延長、生産諸要素の価格騰貴の割合以上に生産物 W' の価格が騰貴した場合。
- (c) 生産諸要素の価格騰貴、生産物 W' の価格低落の割合以上に回転期間が短縮された場合。
- (d) 回転期間の延長の割合以上に生産諸要素の価格低落、生産物 W' の価格騰貴があった場合。
- (e) 生産諸要素の価格騰貴の割合以上に回転期間の短縮、生産物 W' の価格騰貴があった場合。
- (f) 生産物 W' の価格低落の割合以上に回転期間の短縮、生産諸要素の価格低落があった場合。
- (g) 回転期間の短縮、生産諸要素の価格低落、生産物 W' の価格騰貴がともにあった場合。

以上のような場合に貨幣資本の一部分は、資本の再生産過程から遊離される。

資本の再生産過程から遊離された貨幣資本は、この過程の外部に存在し、それは資本として機能しつづけるべきで

あるが、一時的に「遊休」し、「失業」している。したがって、それは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しているところの「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。すなわち、それは「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。しかし、この「遊離貨幣資本」は、一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に形成されるものであるから、それは「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「特殊の形態」であると考へなければならぬ。

四

第三節においては、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程におけるどのような契機にもとづいて形成されるか、そして、それは具体的にどういう目的、役割をもって存在しているか、ということについて考察し、再生産過程における必然的契機にもとづいて形成されるものとして固定資本の減価償却基金と「新たに蓄積された未投下貨幣資本」との二つの「資本形態」をあげ、さらに一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成される「特殊の形態」として「遊離貨幣資本」をあげて、それぞれの形成される契機、目的、役割などについてあきらかにした。そこで、最後に飯田繁教授および麓健一教授の「蓄蔵貨幣の第二形態」についての見解を簡単に検討しておくと思う。

(一) 飯田繁教授の見解

「つぎに、資本家的社会における蓄蔵貨幣の第二形態というのは、一般的に、貨幣形態で遊休しているところの、すなわち一時的に就業していないところの、資本の形態のことである。この種の資本形態には、つぎのようなものが属する。(1)資本がその流通期間を通過するあいだ、資本の生産過程が中断されないために必要な追加的貨幣資本(遊休貨幣資本)。……中略……(2)生産

に必要な貨幣資本の全額が、すぐさまいちどに、生産資本である生産手段や労働力に転化されるのでないところから生ずる休息（遊休）貨幣資本、（3）再生産の規模が変化しないばあい、生産手段または労働力の価格低落から生ずる遊休貨幣資本、（4）固定資本の減価銷却基金（Amortisationfonds）として固定資本の取換期まで積立てられ保蔵される遊休貨幣資本、（5）利潤のうち資本蓄積（拡大再生産）のために、投資適量にたつするまで積立てられ保蔵される部分（貨幣形態にある蓄積用剰余価値）。これらは資本の回転期間、再生産過程から必然的または偶然的に生ずるところの、資本家の生産様式における独特な蓄藏貨幣である」（飯田繁著、新訂『利子つき資本の理論』、昭和三十三年、一九一〜二二ページ）。

飯田教授が、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣としてあげられている「資本形態」は五つである。これらのうち、われわれにとつてとくに問題となるのは（1）および（2）である。

飯田教授が、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣としてあげられている（1）の「資本がその流通期間を通過するあいだ、資本の生産過程が中断されないために必要な追加的貨幣資本（遊休貨幣資本）」は、教授の註記（前掲書、一九三二ページ）のように『資本論』第二卷第二篇第十五章資本投下の大きさに及ぼす回転時間の影響のなかで述べられている「追加貨幣資本」のことである。わたくしは、旧稿（『蓄藏貨幣論（二）』、『立教経済学研究所』第十卷第三号所載）においては、この「追加貨幣資本」は「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣であると考えていた。ところが、その後、研究をすすめていくにしたがい疑問が生じてきて現在では、この「追加貨幣資本」は「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣ではなく、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣であると考えている。なるほど、この「追加貨幣資本」は $G - W \begin{matrix} \diagup \\ \text{PmA} \\ \diagdown \end{matrix}$ という貨幣資本としての能動的機能はおこなっていない。能動的に貨幣資本としての機能をおこなっていないという意味においては、それは「遊休貨幣資本」である。しかし、この場合の「遊休」というのは、本稿第二節において考察した（二）の考え方にもとづく「遊休」であつて、それは「休息」ということ

を意味している。資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部において「遊休」しているという本来の意味における「遊休」ではない。なぜなら、この「追加貨幣資本」は、生産過程を連続的、恒常的におこなうための不可欠の条件をなしており、それが存在することによってのみ、価値増殖がたえず連続的におこなうるのであるからである。したがって、この「追加貨幣資本」は、資本の再生産過程において「機能している」貨幣資本の一状態であり、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならぬ部分」であるところの「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であると考える方が妥当である。教授が(1)としてあげられている「追加貨幣資本」は、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣ではない。⁷⁾

(7) 前稿「『蓄蔵貨幣の第一形態』について」においては、とくに、この「追加貨幣資本」についてはふれていなかったところに補足しておく。

つぎに、飯田教授があげられている「資本形態」は、(2)「生産に必要な貨幣資本の全額が、すぐさまいちどに、生産資本である生産手段や労働力に転化されるのでないところから生ずる休息(遊休)貨幣資本」であるが、これについては、教授は、『資本論』第二巻第一篇第二章第一節単純再生産、とくに原典七二ページを参照せよと註記されている。(前掲書、一九四ページ)。この「とくに原典七二ページ」のところ、教授が参照せよと註記された文章は、わたくしが、前稿の第二節においてとりあつかった(1)の文章である。わたくしは、この文章を『資本論』第二巻における「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣について、マルクスのがべている箇所としてとりあつかった。したがって、私見では、教授が(2)としてあげられている「資本形態」も「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣ではありえない。

飯田教授は、この(1)および(2)をふくむ五つの「資本形態」が「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるとのべられているのであるが、なぜ、これらの五つの「資本形態」が「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であると教授が考えられるのか、ということを検討してみると、それは、「蓄蔵貨幣の第二形態」というのは、一般的に、貨幣形態で遊休しているところの、すなわち一時的に就業していないところの、資本の形態のことである」という場合の「貨幣形態で遊休している」、「一時的に就業していない」ということを、教授は、 $G - W \begin{matrix} \diagdown \\ P_m A \end{matrix}$ という貨幣資本としての能動的機能をおこなっていないという意味において理解されていることからきていると思われる。したがって、教授が「遊休貨幣資本」といわれる場合のそれは、貨幣資本としての能動的機能をおこなっていないという意味における「遊休貨幣資本」である。このような意味に「遊休貨幣資本」を理解すれば、五つの「資本形態」はすべて「遊休貨幣資本」となるであろう。しかし、このように理解すれば、おおそ貨幣形態にある資本は、能動的に貨幣資本としての機能をおこなっていないのであるから、すべて「遊休貨幣資本」であるとしなければならない。教授は、「資本家社会における蓄蔵貨幣の第一形態」というのは、機能しつつある資本のうちいつも貨幣形態で存在しなければならぬところの、支払手段・購買手段——国内的・国際的流通のための——の準備金のことである」(前掲書、一九一ページ)と「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてのべられているが、「機能しつつある資本」であるといっても、それが「貨幣形態で存在しなければならない」かぎり、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣もまた「遊休貨幣資本」であると規定しなければならないはずである。だから、「遊休貨幣資本」を教授のように理解するならば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣との区別をあきらかにすることはできない。

教授は、「遊休貨幣資本」を以上のように理解されて、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるところの(1)および(2)をも「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるとして、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の二つの形態を混同されておられる。そしてまた、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が具体的にどのような契機にもとづいて形成されるのか、その目的、役割は、どのようなものであるのかということをあきらかにしえなくしておられる。

飯田教授が、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣として第三にあげられている「資本形態」は(3)「再生産の規模が変化しないばあい、生産手段または労働力の価格低落から生ずる遊休貨幣資本」である。ここで、教授がのべられている「遊休貨幣資本」は、本稿第三節の(三)においてのべた「遊離貨幣資本」に相当するのであるが、教授の規定では十分でないように思われる。というのは、「再生産の規模」が不変であっても回転期間が延長されるか、あるいは生産物 W の価格が低落すれば、たとえ「生産手段または労働力の価格低落」が生じたとしても貨幣資本の一部分が「遊離」されるとはかぎらないからである。生産手段または労働力の価格の低落によって「遊離貨幣資本」が形成されるのは、本稿第三節の(三)においてのべた(1)、および(4)、(6)、(7)の(a)の場合である。教授は、「遊離貨幣資本」が形成される場合について、その前提とされるべきことについては不十分であるが、生産手段または労働力の価格が低落する場合だけしかあげられていない。しかし、「遊離貨幣資本」が形成されるのは、たんに生産手段または労働力の価格が低落する場合にかぎられているものではない。

「遊離貨幣資本」は、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成される「遊休貨幣資本」であり、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「特殊の形態」である。これにたいして、教授が(4)、(5)としてあげられている

「固定資本の減価銷却基金」、「貨幣形態にある蓄積用剰余価値」は、資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成される「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣である。したがって、論理的叙述の順序は、「遊離貨幣資本」を教授は(3)においてのべているが、これは「固定資本の減価銷却基金」、「貨幣形態にある蓄積用剰余価値」をのべたのちに、とりあげるべきであると思う。

つぎに、蘆健一教授の見解についてみてみよう。

(二) 蘆健一教授の見解

蘆教授は、蓄藏貨幣を大別してつぎの二つの形態、すなわち、(一)「致富欲から形成される蓄藏貨幣」、(二)「交易上の必要から形成される蓄藏貨幣」とに区分しておられる。そして、後者についてつぎのようにのべられている。

「これは『交換過程によって直接に必要なとされる』(Kritik, S. 157.)貨幣蓄藏ともいわれるが、これにもまた多種多様な形態が区分されうる。まず単純流通の場についていえば、(1)、「鑄貨準備金」=購買手段の準備金、(2)、支払手段の準備金、(3)、世界貨幣の準備金の三種であり、資本流通の場についていえば、(1)、購買手段の準備金、(2)、支払手段の準備金、(3)、資本の回転速度の増大、生産資本の各諸要素の価格下落、再生産過程の縮少、最終生産物 W の価格上昇、あるいは商業信用および総じて支払決済制度の発達、等々のような外的諸事情による中断に基づく非自由意志的な蓄藏貨幣、(4)、固定資本の償却準備金、(5)、資本蓄積準備金、等々である。ついでにいえば、マルクスは右の資本流通の場における蓄藏貨幣の諸形態のうち、(1)および(2)の購買=および支払手段の準備金を『蓄藏貨幣の第一形態』とし、『この蓄藏貨幣はたえず流動しているのであって、たえず流通に流れこみ、またたえず流通からかえってくる』といっている。つぎに、(4)と(5)の固定資本の償却準備金と資本蓄積準備金を『蓄藏貨幣の第二形態』とよび、これらは『貨幣形態で遊休している・一時的に失業している・資本の形態である』と規定している(Vgl. Kapital III, S. 350.)。そしてこれらはすべて『流通過程の必然的沈殿物にはかならず』(Ebd. S. 352.)ともいっている。その意味するところは、交易上の必要から形成される蓄藏貨幣であるということである(蘆健一、「鑄貨準備金」と蓄藏貨幣」、『バンクング』、第一四四号、昭和三十五年三月、所収二八ページ)。

麓教授は、右の引用文であきらかなように、「資本流通の場」において「交易上の必要から形成される蓄蔵貨幣」の諸形態として五つあげられている。そして、「ついでにいえば」という言葉につづいて、マルクスは「(1)および(2)の購買IIおよび支払手段の準備金を『蓄蔵貨幣の第一形態』とし、(4)と(5)の固定資本の償却準備金と資本蓄積準備金を『蓄蔵貨幣の第二形態』と」よんでいるというようにのべられている。教授は、あたかもマルクスが「固定資本の償却準備金と資本蓄積準備金」とを「蓄蔵貨幣の第二形態」とよんでいるかのようにかかれているが、マルクスが「蓄蔵貨幣の第二形態」ということを明記しているところで明示しているのは、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」と表現されている後者の「資本蓄積準備金」のみである。したがって、前者の「固定資本の償却準備金」を「蓄蔵貨幣の第二形態」とよんでいるというマルクスの叙述は存在しない。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてのマルクスの規定を正しく理解することによって、固定資本の減価償却基金は、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるということが理解されるのである。

麓教授は、(1)および(2)は「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であり、(4)および(5)は「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるとされているのであるが、(3)の「資本の回転速度の増大、生産資本の各諸要素の価格下落、再生産過程の縮小、最終生産物 W の価格上昇、あるいは商業信用および総じて支払決済制度の発達、等々のような外的諸事情による中断に基づく非自由意志的な蓄蔵貨幣」はどのように理解されておられるのであろうか。それは、「蓄蔵貨幣の第一形態」、「蓄蔵貨幣の第二形態」のいずれにぞくするのか、あるいは、いずれにもぞくしないのか、教授はあきらかにされていない。

教授が、この(3)でのべられている「資本形態」は、本稿第三節においてのべた「遊離貨幣資本」に相当するのであ

るが、教授は「外的諸事情による中断に基づく非自由意志的な蓄藏貨幣」というようにのべられているので、マルクスがこの「非自由意志的な蓄藏貨幣」についてどのようなようにのべているかをみてみよう。

「流通過程の進行が障碍にぶつかって、Gが市場状態などの外的事情によりG—Wなる機能を停止せざるをえず、したがって長かれ短かれ貨幣状態にとどまるとすれば、それはやはり、単純な商品流通でもW—GのG—Wへの移行が外的事情によって停止されれば生ずるような、貨幣の蓄藏貨幣状態である。これは非自由意志的貨幣蓄藏である。われわれの場合では、貨幣はかくして遊休的・潜在的貨幣資本の形態をとる」(『資本論』第二巻、S. 3. 長谷部訳、青木版一〇二ページ)。

資本制生産のもとにおいて非自由意志的な貨幣蓄藏の結果として形成される蓄藏貨幣は、「遊休的・潜在的貨幣資本」の形態にあるとマルクスはのべている。ここで「遊休的・潜在的貨幣資本」というのは、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣を規定する「遊休貨幣資本」である。したがって、教授が(3)としてあげられている「資本形態」は「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣であると考えるべきである。しかし、この形態の「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成されるものである。さきに、飯田教授の見解についてのべたことと同様に、麓教授が(3)としてあげられている「資本形態」は、「固定資本の償却準備金」、「資本蓄積準備金」ののちにとりあげるのが論理的叙述の順序であると思う。

ところで、麓教授は、「非自由意志的な蓄藏貨幣」、われわれの場合では、「遊離貨幣資本」が形成される諸契機についてはまだ「外的諸事情」を列举されているにとどまり、なんらの前提をも指摘されていない。たとえば、「資本の回転速度の増大」についてみれば、生産諸要素の価格騰貴、生産物Wの価格低落が、「資本の回転速度の増大」とお

なじ割合で生じているとすれば、たとえ回転速度が増大しても貨幣資本の一部分はけっして遊離されることはない。したがって、「資本の回転速度」、「生産資本の各諸要素の価格下落」、「最終生産物 W の価格上昇」などによって貨幣資本の一部分が資本の再生産過程から遊離されるのは、本稿第三節の(三)においてのべたように一定の諸条件のもとにおいてのみである。

教授は、なおこれらのほかに「再生産過程の縮少」と「商業信用および総じて支払決済制度の発達」とを「外的諸事情」としてあげられているが、前者は、資本制生産の本来の発展形態ではなく、また資本の遊離は生産の規模が不変であるということ为前提としてのみ科学的に論じうるのであるから、そして後者は、信用の問題に関連するから(註(一)でのべたように本稿ではまだ信用を考慮外にしている)、ここでは、これらのものについてはとりあつかわない。

以上、われわれは、第二節において「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」であるという規定について考察し、そして、第三節においてこの規定にもとづいて「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の具体的な「資本形態」として(一)固定資本の減価償却基金、(二)「新たに蓄積された未投下貨幣資本」、(三)「遊離貨幣資本」をあげ、それぞれの形成される契機、目的、役割などについて、さらに、第四節において飯田、麓両教授の見解を検討してきた。これらの考察によって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、どのような蓄蔵貨幣であるかということがあきらかにされえたと思う。

(一九六〇年五月)